

Ⅲ 研究のまとめ

今回の研究は、『「豊かに表現する児童生徒」を育む授業の在り方』を主題として、国語、音楽、図画工作・美術、体育・保健体育、自立活動のグループがそれぞれに定義した「表現」に基づき、教科等の特性を生かした授業実践、様々な支援を行った。児童生徒の内面に寄り添いながら支援を改善し、児童生徒の表現の変容を確認することができた。各教科等グループによる児童生徒の変容と考察をまとめる。

1 成果

(1) 各研究グループの実践における児童生徒の変容

<国語の実践について>

表現の定義	音声や文字を通して内容を理解し、状況や思考、感情などを伝え合うこと。
表現の変容	・言葉を一生懸命探して話したり、書いたりした。自分の気持ちを表す言葉が増え、文としての表現が深まった。
まとめ	・『語彙力』『形容する力』『構成する力』の3つの力の向上を支援のアプローチにした実践が、検証授業『行事の振り返り』において「表現」の向上に有効であった。

<音楽の実践について>

表現の定義	「鑑賞」や「表現（歌唱、器楽、身体表現、創作）」における相互の活動の中で作られた音や音楽。
表現の変容	・演奏するときに自分の表現したい音色を意識し、楽器を選んだり、楽器の奏法を工夫したりするようになった。 ・苦手意識のあった児童生徒が音楽を楽しみに、意欲的に取り組むようになった。
まとめ	・児童生徒の発達年齢を踏まえたアプローチを授業で行ったことで、興味・関心の高まりにつながった。 ・生徒と教師が共に考える授業になっていった。

<図画工作・美術の実践について>

表現の定義	作品の制作過程及び結果として、行為を形にしたり、自分の想いや感じたことを表したりすること。
表現の変容	・多くの児童生徒の制作意欲が高まり、集中して粘土に向き合う様子が見られた。また、自分が作りたいイメージをすぐにつかみ、形にしたり、言葉で説明することができるようになった。
まとめ	・教師が児童生徒のいかなる表現も受け入れ、励ましや共感の言葉掛けをするなどの支援が、児童生徒が主体的に制作に取り組む変容につながった。

<体育・保健体育の実践について>

表現の定義	一人ひとりが目標に向かって精一杯身体を動かす姿。
表現の変容	・顔を赤らめたり、体をふるわせたりして、目標に向かって取り組もう、頑張りたいという思いが表情、行動として表れた。
まとめ	・「表現」が見られた時は、技能面の記録も向上している傾向が確認できた。 ・発達年齢によって、アプローチの観点が変わってくる傾向が見られた。 ・「表現」を大切に受け止めることが技能面の向上につながった。

<自立活動の実践について>

表現の定義	どうしたら相手に伝わるか、児童生徒が自己選択、自己決定して発信すること。
表現の変容	<ul style="list-style-type: none"> ・相手や場面、状況に応じた適切な言葉や支援ツールを自分で考え、選択して用いることができた。 ・学習で学んだことを学校生活の場面で活用することができるようになった。 ・課題の遂行率が数値の向上として表れた。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・学習課題に対してどう答えようか考える、取り組んでいる様子が、言葉や表情、行動に表れ、「表現」として定義した「自己選択、自己決定」していることとして確認することができた。 ・支援の視点に基づいた授業の手立てを行い、改善を行うことが有効だった。

(2) 仮説の検証について

本研究の仮説は、『教科等における児童生徒の「豊かに表現している姿」を明確にし、各教科の特性を押さえた授業設定や支援を行うことで、児童生徒は自分の思いを様々な形で表すことができるだろう。』であった。各教科等における児童生徒の表現の変容（1-成果）の他、各教科で「豊かな表現」として出されたエピソードの記録（表1）から、「表現」を定義することにより、児童生徒の実態と目標が明確になり、授業で引き出したい児童生徒の姿に向けた支援を具体的に考えて授業を行うことができたと考える。

「豊かな表現」の変容～エピソード記録から抜粋～
<ul style="list-style-type: none"> ・目標や課題を自ら設定するようになった。 ・学習や活動に必要な用具の使い方の工夫が広がった。 ・気持ちや思いを伝える言葉が増えた。語彙数が増加した。 ・自分の考え、気持ちを言葉で伝えられるようになった。 ・相手への意識、状況に応じた表現等、内容が広がった。 ・苦手だったことに意欲的に取り組むようになった。 ・意欲の向上や集中力が高まった。 ・友達への関心が広がった。 ・表現したいイメージを形にすることができるようになった。 ・作品、作風の変容が見られた。 ・楽器の奏法を工夫する様子が見られた。 ・「できるようになったからまたやりたい、楽しかったからまたやりたい」という前向きな発言をするようになった。

表 1

(3) 研究の目的「支援の方法を探る」について見えてきたこと

本研究の目的は、「子ども一人一人が自分の思いを豊かに表現するための、支援の方法を探る」である。支援の在り方は、各研究グループによって教科等の特性を踏まえ、児童生徒の実態や授業に応じて異なる内容や方法で実践されたが、「豊かに表現する児童生徒を育む」ために授業を振り返り、表現の段階表を改善の根拠にし、改善のアイデアを出し合うことができた。

授業を動画や音声で記録したもの、作品等を基に、数値化した評価やエピソード記録による評価等を通して児童生徒が学習に取り組む姿を明らかにし、教師が行った支援、改善した支援、効果的に働いた支援にどのような意図や配慮があるかを分析、整理した。

例えば、言葉掛けには、活動内容や目標、課題を正しく理解できるようにという配慮、技能を正しく身に付けられるようにという配慮、言葉掛けの量やタイミングでは、児童生徒自身が気付くことができるように、さらに考えることができるようにという配慮が確認できた。私達教師は、児童

生徒の表現を育もう，表現を広げようという思いの下，改善を通して行った支援には様々な配慮点が見えてきた。この配慮は，言葉掛けだけではなく，教材とその提示，場面の設定，友達や教師とのかかわりなどにも確認することができ，それぞれの配慮を4つにまとめることができた。(図1)



図1

そして，それぞれの配慮を児童生徒の「表現」を豊かにしていくための支援の要素として位置付け，「主体性への支援」，「考え・判断への支援」，「スキル・手段への支援」，「理解への支援」の4つに整理することができた。「表現」を育むために必要な力，児童生徒が身に付けなければいけない力ではなく，授業を行うにあたって大切にしたい支援の要素である。(図2)

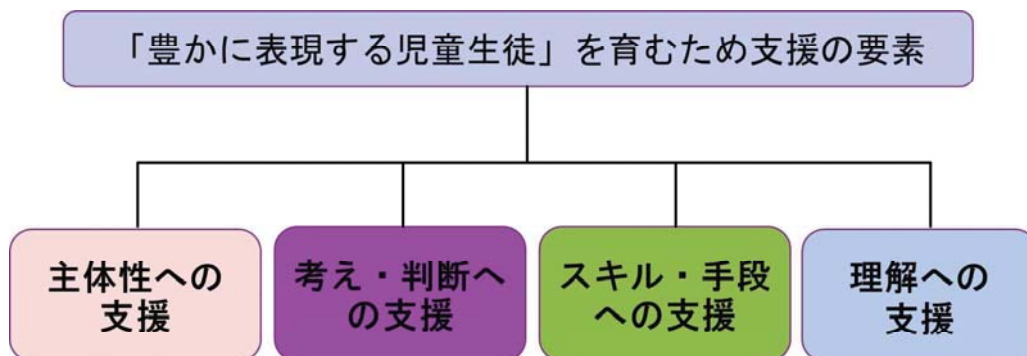


図2

2 課題と展望

(1) 段階表の検討

今回の研究では，共通の押さえとして，表現の段階表を作成し，個々の実態に合わせて段階的に表現を豊かにしていく支援を行った。表現を育むという目標に向かって学校全体として児童生徒に願う「表現」の姿を明記，確認し，児童生徒の目標設定や目標に向かって支援の在り方を探るなど，授業作りに生かすということはできたが，児童生徒の変容を検証する指標として活用することが難しく，運用面での課題が残った。

(2) 支援を改善する視点をもった評価の充実

今回の研究では、支援の在り方を考えるために、映像や音声、作品等をもとに、数値化した評価やエピソード記録による評価などの情報をもとにして児童生徒の学習に取り組む姿、表現の変容を追い、教師による話し合いを通して支援の改善を行ってきた。その中で、授業の目標の見直しや支援の改善につながる評価ができたかという点において、データの取り方、分析の方法についての弱さが課題となった。支援の充実を図るために、支援を改善する視点を具体的にもち、児童生徒の表現を評価したり、私達教師の支援を評価していくことが求められる。

本研究は、実践期間を2年間としつつも、実際に児童生徒の指導実践、検証した期間は1年足らずであり、研究内容・方法、検証方法について十分に熟考し、実践できたとは言いがたい。今回の研究は、研究主題の中心に「表現」を据え、将来自分のもっている力を精いっぱい発揮し、思いを伝え、積極的に社会参加できる児童生徒になっていけるように、授業改善を通して支援の在り方を探ってきた。今回の研究によって見出すことができた、4つの支援の要素は、国語、音楽、図画工作・美術、体育・保健体育、自立活動以外の教科等における授業においても支援の在り方として十分生かすことができると考える。知的障害の特別支援学校である本校は、遊びの指導や生活単元学習等、各教科等を合わせた指導における授業作りについても実践を行っていく必要がある。さらに、今後は、学校教育目標を次期学習指導要領の改訂の方向性と関連させてさらに具現化していくことが求められる。児童生徒一人一人の資質・能力を育てていくための授業作りを追求していきたい。

(謝辞)

本研究を進めるにあたり、弘前大学教育学部 教授 本間正行氏、教授 今田匡彦氏、教授 蝦名敦子氏、准教授 増田貴人氏、准教授 天海丈久氏、講師 中山忠政氏からご指導を賜りました。ここに感謝の意を表します。